

不妊治療現場の過去・現在・未来

連載4

～ 不妊のお家事情 ～

荒木 晃子

最近のトピックス

2011年2月9日、妊娠に関する国際意識調査の結果、日本人は「子供を持ちたい」という要求や必要性が際立って低く、「妊娠はしたいが、『充実した人生には子どもが必要』と考える日本人カップルの割合は、世界18カ国中最下位」という報告があった。これは、英国カーディフ大学と製薬会社「メルクセロノ社」の共同研究「スターティング・ファミリーズ(妊娠を希望しているカップル 18カ国の男女 10,000人、内日本人 481人を対象にしたインターネットによる国際意識調査)」の調査結果として報告されたもので、妊娠に対する大規模な国別意識調査は過去に例がなかったという。また、同調査によると、「不妊をパートナー、家族、友人に打ち明けることの容易さ」もまた、日本人カップルは18カ国中最下位であったという。

不妊に国境はない？

驚きの報告であった。自身の当事者経験に加え、生殖医療の心理士として、不妊に悩む当事者の語りを聞き続ける体験からは、とうてい想像もつかない結果である。私が出会う当事者たちは、子どもを必要と考え、子どもを持ちたいと切望しても、妊娠～出産できないことに苦しんでいる人たちなのである。

日本では、「妊娠を希望している」カップルが「子どもを持ちたいと望んでいる」とは限らない一うへの調査結果からは、そう推測できる。さらには、日本人カップルは、「妊娠したいが、子どもが必要と考えているわけではない。でも、不妊(症もしくは現象)のことは、友人、知人、パートナーにさえも打ち明けられないと18カ国の中で一番強く思っている国民」らしい。

国内での意識調査といえば、5年ほど前、筆者が提携する生殖医療施設(島根県内田クリニック)の協力を得て、不妊治療を受診した男女別、カップル毎、個人別の不妊治療初期患者を対象に実施し分析した意識調査(2006年度立命館大学応用人間科学研究科修士論文)がある。偶然にも、先に記述した国際意識調査の質問項目は、筆者の質問

項目と一部酷似していた。そのひとつに、「不妊治療を受けることを誰(パートナー・家族・職場・知人・他人)に知られたくないですか?」という質問項目がある。男女それぞれ複数回答から、結果、ほぼ同数に「知られたくない」という回答があった。特徴として、女性:2対男性:1の割合で、もっとも「他人には知られたくない」との回答が最も多かった。二つの調査の類似した質問項目に対する回答を統合し、以下に考察を試みた。

18カ国中、もっとも不妊を身近な人に打ち明けることは容易ではないと思っている日本人カップルが、不妊を治療することを、もっとも他人に知られたくないとおもいながら通院することは、治療環境上理想的とは言いがたい。また、国内の不妊当事者カップルは、不妊を容易に相談できる対人関係を持たず、不妊治療を開始することや受診することをもっとも他人に知られたくないという、ストレスフルな環境下で生殖医療施設に通院している実際がある。以上から、日本では、不妊は医療者に相談する医学的な問題であり、当事者は、生殖医療にその解決手段を求めやすい傾向にあるといえるかもしれない。しかし、それは、決して当事者意識に限定した認識ではないだろう。たとえば、就活や婚活などの、人生のある時期に通過する課題に個人の「選択と決断」が迫られた場合、社会にはさまざまな支援体制が整備されている。同じ課題でも、不妊とは、大きく異なる社会認識があるようだ。

過去に、不妊問題の解決を日本の社会が整備してこなかったという事実は、連載①～③のエピソードで、その時代を生きた不妊当事者が語り、それを証言してくれた。生殖革命を経た現在、生殖医療のほかに、不妊問題の解決に向けた支援のない日本で、不妊

を治療する以外の手立てを知るすべのない当事者たちに向けた支援がないことは、社会の果たすべき重要課題とはならないだろうか。

日本のコールドケース

生殖医療に端を発する諸々の社会問題への指摘やバッシング、当事者カップルの海外渡航禁止を推奨し、問題が生じやすいといわれる生殖医療技術への規制を求めるジャーナリストや研究者の声明など、時代は変われど、進化する生殖医療技術に対する社会的批判がなくなる現状に、不妊当事者は昔と変わらぬ現実を今もなおみているだろう。それは、おそらく、「病を診て人をみない医師」や「起きた問題に焦点を合わせ、本来担うべき役割から逸脱する援助者」たちがあとを絶たないことと同様に映るだろう。通常、マスコミ等で大きくクローズアップされた問題を取り上げて批判し、その原因や因果関係を探る言動は、センセーショナルで一躍脚光を浴びる要因となり得る。対して、問題の起きたその人を支援し、起きた問題が二度と繰り返されないように改善点を探し、そこに必要な支援とシステムを構築しようとする働きに、スポットライトはあたりにくく、社会的評価を得ることは容易ではない。しかし、後者なしには、問題の再発は防ぎようがなく、次に問題が起きないようにする手段は見えてこないと思う。他の誰かが、さらには次の世代に同様の問題を繰り返さないために、なすべきこと・必要なことを、当事者とともに援助者が模索することから問題の解決手段が明らかになると思う。いつの世も、常に、ことを起こすのは人なのだ。問題の起

きた人を「問題のある人」とし、問題を「個人の体験」に終わらせることのないように、また、「問題が起きることはやらない」ではなく、問題が起きないためにはどうすればいいか、どう支援できるかを考えなければならないと思う。結果として、援助手段の見つからない問題や、支援があっても改善できない問題は、容認できないと審判が下るのかもしれない。その前提で考えると、問題が起きやすい生殖医療にセーブをかける以前に、いや、それ以上に、生殖医療に関わる社会的支援の充実をはからないことを問題にせず、社会に緊急課題として提示されていない現状に、今も憤りを隠せない。

再び問う

日々飛び込んでくる国内外の不妊関連の情報を時折こころをうばわれながら、再び当事者の足跡をたどる道程にもどることにした。連載②から語り始めたB子さんは、生殖革命の福音を聞いた女性である。20年以上も前の不妊体験を、まるで昨日の出来事のような鮮明な記憶のまま、軽快に語り続ける彼女の語りには、ダブル・メッセージがあった。“福音に子どもを産む希望を感じた”と語る一方で“失敗を繰り返すなか少しずつ自分を見失っていた”、さらに、“頑張っていた自分”の対象に“自分であって自分でなかった”と彼女は語っていた。私は、「不妊治療は私たち夫婦にとって福音だった」と明快に答えたB子さんに、「あなたにとっては、どうだったのですか？」と勇気を出してたずねたのだった。その際B子さんは、「夫婦の福音は、私にとっても福音に決まっているでしょ？」と軽く受け流す

ように答えていた。

では、なぜ、彼女は現在独身なのか。共に福音を聞いた夫婦がなぜ、今も夫婦ではないのか。私の疑念は全く払拭できなかったのだ。私の頭から溢れだそうとする“なぜ？”を理性で抑え込みつつ、再び、「だれの福音か」を問うてみた。

「う～ん…そういわれてもねえ…(しばし沈黙)、不妊は結婚していたから問題になっていたんであって、いまの私にとっては、問題でも悩むことでもないのよね」

問うた私をじっと見つめたあとうつむき、目を閉じ腕を組んだまま、しばらく微動だにしないB子さんをみて、一瞬眠ってしまったかと思った。同時に、「もしかして、私は聞いてはいけないことを聞いてしまったのかもしれない」という後悔の念が、一瞬脳裏をかすめた。

「そう！結婚していたから悩みになっていたんだと思うわ！」

突然、答えがひらめいたかのようにB子さんは語り始めた。

「私たちは恋愛結婚だったの。今でいう、大恋愛ってやつね。同級生でまだ20代前半、しかも、社会に出てお互い自立し始めたころだったし、一人暮らしもしたいって考えてた。そんな時好きな人が現れて、“ずっと一緒にいたい”って思った。となると、当たり前のように結婚話が出るわよね？私にとって、結婚することは、好きな人の子どもを産み、ふたりでその子どもを育てることだと思っていたから、“この人の子どもなら産んでもいい”と実感できた時点で、結婚することに躊躇はなかった。母からは、“娘がどんなすばらしい男性を連れてきても、父親は気に入らないものよ”って、ずっと前に聞いていたから、ある程度の

抵抗は覚悟した。結局、ご多分にもれず、それなりのゴタゴタはあったけれど、そこは若い二人だけに、反対があればある程互いの思いは強くなるっていうか…ま、最後にはふたりで勝手に結婚式をあげちゃったんだけどね！」いつもの軽快な口調にもどっていた。私の眼を見ながら、感情豊かに語るB子さんの表情には、その頃に幸せな生活をおくっていたであろう様子が見て取れた。

「とても充実した結婚生活だったと思う。時にはケンカをし、“朝までテレビ”を一晩じゅう見ながら、政治や経済、その頃話題になっていた事件について、時間がたつのも忘れて話をする夫婦だった。おまけに、夫婦そろって友人が多く、私が料理好きなこともあって、休日には互いの友達を呼び、一緒に友人たちと過ごすことが多かったの。中には、我が家で知り合った事がきっかけでなん組かのカップルは結婚したな…」

少し首を右にかしげ、遠い記憶をたどりながら目を細め、口元に笑みを浮かべながら小さなため息をついた。

「でもね、そのうち、次々と妊娠報告が入るようになって…いつか、生まれた子どもと一緒に来客が増えてきたの。あまりの可愛さに、つい抱き上げてしまう私に、“B子さんのところはまだ？”って、何回聞かれたかな…。回数なんか覚えてないけど、そのうち、聞かれるたびにそれを苦痛に感じるが多くなっていった」

これが、当事者女性の多くが語る「子どもはまだ？」と聞かれることへの苦痛だ。たずねる人には他意のない言葉だが、不妊に悩む当事者にとっては、もつとも聞かれたくない質問といわれている。

「そのうち、友人たちを家へ招く機会も減り、

代わりに夫婦ふたりで旅行に行く機会が増えた。特に、海外旅行や海へ波乗りに行ったり、冬にはスキーに行ったり。ゴルフも覚えて、ふたりに共通の趣味を楽しむ時間がふえてきた。あの頃は、何をするにも一緒だった。それは、私が不妊治療に通院するようになってからますます増えた。きっと、頑張る自分たちへのご褒美だったのかもしれない。だって、その時期は、不妊治療していることを、互いの家族のだれにも言えなかったから。通院する日も、“ゴルフに行く”と言い訳したこともあったくらい。そのうち、「あのふたりは、友達づきあいも止め、子どもがいないことをいいことに、遊び歩いている。いい身分だ」と言っている人がいる、という雑音が聞こえてきて、結局人づきあいが面倒になり、孤立してしまった。私は、子どものいない友人との時間を楽しむことに限定し、趣味の時間をもつ代わりに不妊治療に専念することにした。ある晩、パートナーがお酒を飲んで遅くに帰宅し、珍しく私に絡んだことがあった。「今日、久しぶりに会ったHに酒の席で言われた。『いくらお金があっても、贅沢できても、子どももつけれないとは情けない。男なら、悔しかったら、子どもの一人ぐらいつくってみろ！』と。」苦悩に顔をゆがませ、「くそっ！くそっ！」悔し涙を流し、繰り返しそう叫びながら、いつしか彼は泥酔していた。その晩、私は一睡もできなかった。あの日から、私たちの関係は少しずつ変わっていったと思う」

「ちょっと待ってね」そういつて、B子さんは言葉を休めた。その頃、正直、私は投げかけた質問を撤回したい気分になっていた。時に、絞り出すように「う～ん…」と唸りながら、苦しうに顔をゆがめるB子さんを眺めながら、「やはり、聞くべきではなかった」とも思った。B

子さんの話はあまりにリアルで、私自身、まるで夫婦の実態を暴く三面記事の特ダネ記者になったかのような錯覚を覚えた。何か、とてつもなく残酷な質問をしたかのように感じていたのだ。B 子さんにとって、不妊の話をするとは、すでに終わりを告げた結婚生活の日常を語る事であった。不妊は、夫婦の日常に起こっていたのだ。私は、B 子さんの言葉を待たず、次に質問を口にしていた。

「もし、話にくいことならば、無理をしないでくださいね。話すことが辛いと感じるならば、この辺で終わりにしましょうか？」

B 子さんは即答した。

「確かに、その頃の私にとっては辛かった。言葉にできないくらいに、苦しかったわ。でも、今の私は、もう苦しくはない。もし、あなたからみて、私がつらそうに見えるならば、それは、その頃の私の姿だと思って頂戴ね。私は、今、あなたに聞いてほしいと思っているの。だれも、聞こうとしてくれなかった話を。それは、私が、一生懸命、母になろうとしていた頃の話だから。どんなふうに聞こえるのか、私には、まだわからないけれど、悲しいとか、つらいとか、そんな思いは、今の私にはないの。確実に言えることは、その頃の私があるから、今の自分でいられるってことかな？ 不妊の話なんか、聞きたいと思う人はそんなにいないものね！ 不妊って、確かに辛いけど、悪いことばかりじゃなかったと思う」

B 子さんの語りは、どこにでもある夫婦のドラマではない。不妊という経験をした、夫婦の物語である。逆に、B 子さんに励まされ、聞き続けることにした。

(次号に続く)